
[成果情報名] 大豆難防除雑草「ホソアオゲイトウ」の発生生態と防除対策

[要約] ホソアオゲイトウは大豆播種後から10日程度で90%以上が出芽するため、大豆播種直後の土壌処理除草剤による初期防除が重要である。また、出穂期までにタッチダウンiQを塗布処理することで、ホソアオゲイトウの種子結実を抑制できる。

[キーワード] ホソアオゲイトウ、発生生態、薬剤防除

[担当部署] 農産部；大豆・品質チーム

[連絡先] 092-924-2937

[対象作物] 大豆

[専門項目] 雑草防除

[成果分類] 技術改良

[背景・ねらい]

近年、大豆作においてヒユ類が多発し、特に大型化するホソアオゲイトウが問題となっている（平成24年度発生面積2,335ha、食の安全・地産地消課調べ）。ホソアオゲイトウが多発すると大豆収穫が困難となり、また、汚損粒の原因にもなっている。さらに、ホソアオゲイトウは1花穂で7000粒以上の種子を生産することから、一旦発生すると次年度以降の蔓延にもつながる。そこで、ホソアオゲイトウの防除を目的として発生生態を明らかにするとともに、効果の高い除草剤を明らかにする。

[成果の内容・特徴]

1. 大豆播種後10日程度で、ホソアオゲイトウの総出芽数の90%以上が出芽する（図1）。
2. 大豆播種直後の土壌処理除草剤であるクリアターン乳剤、ラクサー乳剤およびフルミオWDGはホソアオゲイトウに対する初期防除効果が高い（図2）。
3. ホソアオゲイトウの出穂までにタッチダウンiQを塗布処理することで、ホソアオゲイトウの種子の結実を抑制できる（表1）。

[成果の活用面・留意点]

1. ホソアオゲイトウの防除対策として病害虫・雑草防除の手引きに登載する。
2. 大豆の出芽・苗立ちを確保することで、大豆の被陰効果により、ホソアオゲイトウの生育（草高および結実種子数）を抑制することができる。
3. 水稻1作の湛水条件下ではホソアオゲイトウの防除効果はみられないため、薬剤による防除を徹底する。
4. ホソアオゲイトウの蔓延を防ぐために、大豆収穫前に残草個体をほ場外へ全て持ち出し、ほ場内に種子を残さない。

[具体的データ]

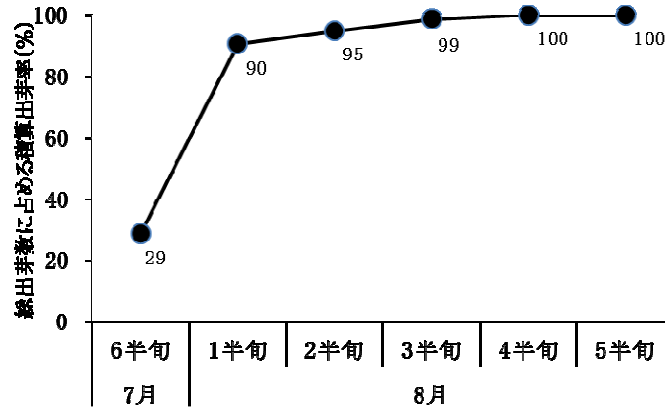


図1 ホソアオゲイトウの出芽推移 (平成 26 年)

- 注) 1. 50cm×50cmのコンクリポットを使用。7/24 にフクユタカ(16 株/m²)とホソアオゲイトウ(200 粒を土壌表面に散布)を播種。中耕培土は未実施。
2. ホソアオゲイトウの最終的な出芽率は 53%。

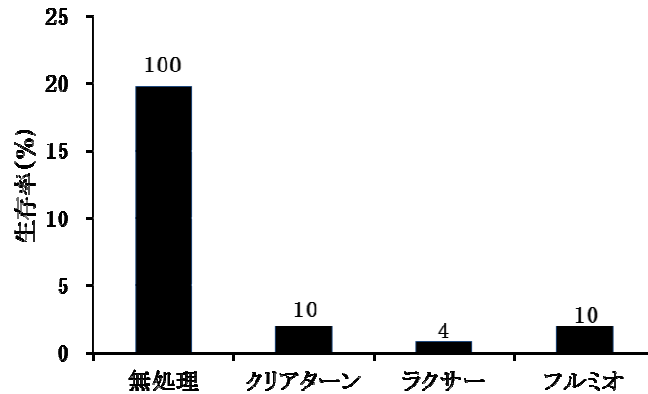


図2 ホソアオゲイトウに対する土壌処理除草剤の効果 (平成 25 年)

- 注) 1. 1/10000a ポットに乾熱処理を施した土壌を充填し、ガラス室においてホソアオゲイトウ種子 100 粒を 10/17 に播種。播種直後にクリアターン乳剤、ラクサー乳剤、フルミオ WDG を 10a あたりそれぞれ、800ml、600ml、10g 処理。
2. 播種 14 日後にホソアオゲイトウの生存個体数を調査。
3. 図中の値は無処理区比(%)。

表1 タッチダウン iQ の塗布時期によるホソアオゲイトウの結実抑制 (平成 24 年)

実施場所	処理日 (月/日)	ホソアオゲイトウ生育ステージ (処理時)	結実有無
嘉麻市	9/5	出穂直後	無
〃	9/22	出穂2週間後	有
岡垣町	11/1	黄熟期	有

注) パクパク PK89 を用いて、0.1ml を 1 個体あたり 2~3 か所塗布。

[その他]

研究課題名：新除草剤及び生育調節剤の適用性検定試験

予算区分：受託

研究期間：平成27年度 (平成24~27年)

研究担当者：緒方大輔、森田茂樹、内川 修